

# 人間成長物語としての絵本の研究 —『しょうぼうじどうしゃ じふた』を手がかりとして—

前田 眞 澄

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2020年10月30日受付、2020年12月2日受理)

## 要 旨

ビルディングス・ロマン、人間形成物語—主に主人公がある出来事を契機として人間として成長していく物語—は教養小説とも訳されるように、教育的にも根幹となる作品だと推察される。おおまかであるが、このような仮説を持って、幼稚園、小学校、中学校、高等学校を貫いて取り上げる絵本・物語・小説の鑑賞の仕方・読み方に見通しをつけることができるのではないかと考える。今回は、手始めに、絵本『しょうぼうじどうしゃ じふた』(渡辺茂男作、山本忠敬絵、1963年、福音館書店、本文27ページ)を取り上げ、幼児が見聞きするのと同じように、見開き13面に描かれた絵→文章の順に読んでいき、その上でどういう特色を持つ人間成長物語なのかを明らかにした。(なお、人間形成物語をあえて人間成長物語と言い換えたのは、「はじめに」に挙がっている『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』などの人間形成物語は、人間形成の一つ一つの過程がていねいに、蜿蜒と書かれている印象が強く、ほんとうの人間形成はその通りだと思われる。しかし、そこにたどり着く前に、その原形となるある主人公がある出来事を通してぐんと成長していく物語が要ると考え、仮に人間成長物語と呼ぶことにした。識者のご批判をたまわりたい。)

キーワード：人間形成、幼児期、絵本、ビルディングス・ロマン

## はじめに—わたしの問題意識、本研究の目的—

人間形成物語〈ビルディングス・ロマン。『独和大辞典<sup>1)</sup>』には、簡略に「教養小説(主人公の人間形成の過程を描いた小説で、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』はその代表なものとして)」とある。〉は、教育にたずさわるものにとって魅力のあることばである。人間形成は、本来教育の究極的目的であるため、すべての読み物がそれを目指していると言ってもよからう。ただし、実際に書かれたものを見ると、人間形成に深く結びつく作品もあるが、それぞれ別の目的があつて、長い目で見ればどこかで人間形成に生きてくるだろうと思える程度にとどまるものも多い。ここで念頭に置くのは、幼児期の子が絵本を読み聞かせしてもらえばかりか、自分でもその後、多くは小学校・中学校・高等学校において読むようになる物語・小説、及び小・中・高等学校の国語教科書に取り上げられる物語・小説である。そこでは主人公があるできごとをきっかけとして人間として成長する姿が描かれる。

典型的な物語として念頭に置いているのは、たとえば斎藤惇夫『冒険者たち—ガンバと十五ひきの仲間—』(1982年、岩波書店、全378ページ)である。自己を見つめて「静かな時に思いだされるようなことは、まだ何一つとしてしたことがなかった」ドブネズミのガンバは、イタチのノロイ一族に狙われ、滅びかけているネズミの忠太の家族と仲間たちを助けるために覚悟を固めて15ひきの友と忠太の島に行き、勝てるはずのないノロイ一族と戦い、絶体絶命の危機に陥るが、オオミズナギドリ<sup>2)</sup>の協力を得て、土壇場で全滅させることができる。しかし、味方の被害も大きく、友も何人も失い、好きだった忠太の姉も好きとも言えないままになくなる。それでも、「何かを求めずにはいられ」なくなって、「広い世界へ」旅立つ。自分の中に、これと言うものがなかった主人公が、何かを契機に、日々一瞬一瞬今までの自己を越えていかなければ生きていけないと言う状況の中で少しずつ自分の生き方の核になるものができ始め、自信をもって生きるようになる。こういう物語は日々成長しつつある存在である子どもにとって最もなじみやすく、必要な「心の食べもの」となる。

小学校でも主人公に同化して読むことによって、主人公とともに成長を遂げるようになる物語が基本軸になっている。そうはいっても、典型的な対象である国語教科書の物語教材を見ても、実際には多岐にわたり、

学年に沿ってどのように配列されているか見抜くのも、ひとすじなわにはいかない。予想として言えば、小学校は、だんだんと人間成長物語に帰着するように構成されているように見える。しかし、これも、きちんと論証しようとすれば、幾多の困難に直面することであろう。

中学校一年の「虹の見える橋」(杉みき子)・「麦わら帽子」(今江祥智)・「少年の日の思い出」(ヘルマン・ヘッセ、高橋健二訳)も、主人公に共感して読みながら、主人公が会うさまざまな困難を読者が共感をもって想像し、ともに乗り越え、成長していく作品である。中学校二年もその傾向は続くが、「走れ メロス」(太宰治)となると、作品中に主人公の心情がこれ以上とらえるのは無理と思えるほど見事に書き尽くされており、これまでとは違い、客観的に発言や行動の真意をなぜ、なぜと掘り下げる別の読み方が必要になり、なぜ場面が二千年以上前に設定され、主人公が成長できたのかを推理したり、逆に王の立場からメロスを見直したりすることも出て来よう。中学校三年生の「握手」(井上ひさし)には、私の行為の理由を考える際にも、向かい合うルロイ神父の発言がなぜ出てきたのか、その人の本質に迫らなければ、答えきれないということも出てくる。「故郷」(魯迅、竹内好訳)では、時代も社会も国も年齢も違う主人公が出てきて、この人に迫るためにはどういう基礎作業をすればよいか、とまどうことも出て来よう。中学校教材において、主人公の人間形成を基軸にするところから出発することは、教材研究をしてみると、まず間違いのないところと思われる。

高等学校になると、高1で「羅生門」(芥川龍之介)、高2で「山月記」(中島敦)、高3で「舞姫」(森鷗外)が出てきて、とまどうことも多いと思われるが、それらの作品にしても、中学校の発展として位置づけられるのではないかと期待している。

そうだとすると、そこにつなげるために、幼児期・小学校時代は、どんな絵本・物語をどのように読んでいけばよいか、私の問題意識である。本稿では人間形成物語の焦点が成長であるため、それを表に出して人間成長物語と呼び、絵本『しょうぼうじどうしゃ じぶた』を手がかりにして、人間成長物語としてどのように共感し、どのように読んでいけばよいかを探っていくことにしたい。

## 一 『しょうぼうじどうしゃ じぶた』の概要と構成

『しょうぼうじどうしゃ じぶた』は、渡辺茂男作、山本忠敬(ただよし)絵で、1963(昭和38)年に福音館書店から出版されている。幼児向けの月刊誌『こどものとも』として出され、好評だったため、「〈こどものとも〉傑作集」として本になったようである。ただし、奥付には傑作集としての第1刷は1966年とあり、先の1963年は『こどものとも』に雑誌として出した年のようである。私の手にしているのは、1991年に65版を重ねている。裏表紙には「読んであげるなら4才から、自分で読むなら小学校初級むぎ」とあり、また「全国学校図書館協議会選定『必読図書』」と明記されている。高く評価されてもおり、幼稚園・保育園・認定こども園でも家庭でも幼児に読み聞かせられている絵本のようなものである。実際には、5歳児に読み聞かせすることが多いであろう。

本文は、中表紙を含めて27ページ。見開き一面で描かれており、本文だけでは13面になっている。この13面は、以下の4場面からなっている。

第1場面(2-11ページ、見開きでは5面)町の真ん中にある消防署で花形の、はしご車ののっぽくん、高圧車のばんぷくん、救急車のいちもくさんが自慢し合うが、大きな火事の時にはそろって跳び出し、大活躍もする。

第2場面(12-19ページ、見開き4面)消防署の隅には、実はじぶたというジープを改良したちびっ子消防車もあり、働き者でもあるが、大きな火事には呼ばれず、晴れやかな検閲の日に磨き上げられていよいよ高さや力強さ、格好良さが際立つ3台と見比べて、劣等感を強める。

第3場面(20-25ページ、見開きでは3面)ちょうどその時、隣村の警察から山小屋が火事との緊急連絡が入る。広がって山火事になると、どの火事よりもひどくなる危険性が高く、緊張感が一気に高まる。出火場所が山小屋であり、山道も狭く、署長はじぶたに託す。ジープのじぶたは、狭く険しい山道を平気で上り、谷川にホースを降ろし、水を吸い込むと山小屋の火元に力いっぱい、息の続く限り吐きかけて、大きくなり始めた火を見事に消す。

第4場面(26-27ページ、見開きでは1面)翌日、町の新聞にじぶたが山小屋の火を消している写真が大きく載り、じぶたの大活躍で山火事にならないで済んだこと、隣村でもじぶた第2号を備えることになったと報じる。そのことがあってからは、町の子供たちもじぶたのことを誇りに思い、「ちびっこでもすぐせいのうがいいんだぞ!」と、わがことのように喜んでじぶたに言い、共感を求める。

以下、本文で取り上げられた4つの場面ごとに、文章と見開きの絵からどのようなことが汲み取れるか、その中で主人公じぶたの心がどのように動いているかを展開に即して考えていくことにしたい。

## 二 第1場面における文章と絵から汲み取れること、そこで考えられるじぶたの心

### 1 町の真ん中にある消防署にいううちの3台の車のみが紹介される(2-3ページ)

幼児と同じ立場に立って、絵から見ていくこととする。見開きの前面が道路になっており、町の真ん中だけに、近くには店やしゃれた家、ビルが並んでいる。その中で画面の少し右に寄ったところに、最も広い場所(見張り塔は入れなくても、見開きの横も縦も半ば近く)を占めているのが消防署である。赤い車が3台、白い救急車が1台と、4台の車が並び、外からも見えるようになっている。車の色で目立つばかりか、大きさでも装備でも人に目を引く。とりわけ中央の赤い2台の車は、人が見上げるほどの高さである。1台はどこもかしこもがっしりしているのに対して、もう1台は少し細めであるが、上にはしごがたんであり、その部分を含めると、一番背が高くなる。おそらく、この車たちが重要な役割を演ずるのであろうと期待される。なお、前のヘッドライトの部分が目になっていて、皆まっすぐ前を見ているが、右隅の一番小さな赤い車のみ右上の方を眺めている。すぐ横のどっしりした車を見上げているようでもあるが、右に並ぶ3台をうらやましく見つめているようにも思えてくる。表紙で大写真になっていたのが、この右隅の一番小さな車だと気づいた子は、このじぶたの視線が気になってくるに違いない。消防署の大部分を占有する格納庫には車だけで人が見えない。格納庫の横に小さな入口があり、格納庫の上にも窓がいくつもあって、消防署員が出入りする場所と見られる。おまけに建物の一角に高い見張り塔があり、画面の枠を超えており、ぎりぎり画面に入るところに、見張りの人が立っている。町のどこかに変事のあるところはないかと見守っているであろう。また、消防署の建物の左側には小さな掲示板があり、何枚もの掲示物が貼られている。

次に、この見開きに書かれた文章を絵と重ねて読むと、さらに、以下に記すようなことが考えられてこよう。

(ア)「あるまのまんなか、しょうぼうしょがありました。」…「まのまんなか」と言うのは、晴れやかな場所で、みんなから注目されやすい。左の方から道を駆けてくる男の子・女の子も、消防署に置いてある自動車たちを見るのが楽しみなのかも知れない。掲示板の下にいる犬も、消防署の掲示板上に何が書かれているか、気になって、上をのぞいているようである。

(イ)「そこには、はしごしゃののっぽくんと、こうあつしゃのぼんぶくと、きゅうきゅうしゃのいちもくさんがおりました。」…消防署にらんでいる3台の役目と名前は了解されるが、4台いるのに、1台だけ無視されたような紹介である。何台いるか数えたり、題名が「しょうぼうじどうしゃ じぶた」だと意識したりした幼児には、驚きが生じよう。題に出てくる主人公が出てこないのである。地の文では説明がないだけに気になる存在になるかもしれない。4台のうち、ひときわ小さいだけに、同情が湧くかもしれない。目(ライトの部分)が他の自動車に羨ましそうに注がれるのにも、無理はないと思えるであろう。

### 2 はしご車ののっぽくんの自慢(4-5ページ)

見開きの2ページいっぱい、右向きのはしご車ののっぽくんの勇姿が横から映し出される。ただし、車体のつくりはよくわかり、上に載せられたはしごの部分のどのように何重にも畳まれているのかも、その先端部で見てわかるようになっている。つまり、顔の見える横向きと言った構図になっている。のっぽくんと命名されるだけあって、はしご車の先は絵本をはみ出してしまふほど高い。はしごは長さもあり、車体もどの消防車よりも長い。画面を圧するばかりの存在感がある。たたんでいるからこの画面に大部分はおさまっているもののまだ4重に伸びることが前に見えるところから推察される。実際に伸びた時にはさらに驚かせられるだろうと思われるものである。それらを貫く軸も先が金色の塔のようになっていて、貫禄に満ちている。

後部には、大型のワイヤーを巻き付けたたり伸ばしたりする装置も取り付けられている。さらに、夜に火事があったばあいを想定して、その場を照らす光の準備も忘れられていない。車体を彩る赤とはしごの水色がよく合っている。

そのような英姿を見たうえで、本文を読むと、次のようなことが見いだされて来よう。

(ウ)「のっぽくんが、とくいそうにいいました。『①みてくれ、ぼくのはしごを。どんなたかいビルがかじになっても、ぼくさえいればしんばいないよ。②するするすると、はしごをのぼして、うえからみずをかけてけしてしまうし、③まどからひとをたすけてやることもできるんだからな。』」…この発言を順にみていくと、①に言うとおりに、やはり何重にも伸びるはしごは、見た目でも、できることから言っても、本人の誇りであり、特に下線部からは、ビル火事など高いところでの火災に強い消防車であると、予想されてくる。そして、この範囲ではあまりにも華々しく活躍し、絶対の自信があるだけに、自分さえいればと言う思い、他の存在を軽く見る思いが、ついつい口に出てしまうのである。。できることの一つは②「するするすると」迅速に高いビルの屋上にまで「はしごをのぼして」高い所まで一旦水を上げることによって、「うえからみずをかけてけしてしまう」とある。はしご車は水を高くから落とすことで、圧力を強めた消し方ができると言うのである。「けしてしまう」という述べ方には、必ず実現するとの自負がうかがえる。そう平然と話すところからは、聞き手が驚くのが当然だ、これでどうだという気持ちが動いていよう。これは、多くの人が知らないはしご車の役割であろう。もう一つが、③にあるように、みんなが周知の「まどからひとをたすけてやることもできる」という人命救助の仕事であるが、「も」と言っており、それが主ではないようである。

こののっぽくんのじまんも、少しえらそうな言いかたをしていて、他の人が要らないような口ぶりはどうかと思っても、じぶたには、大部分はまちがいはなく言えることだと思えよう。

### 3 対峙する高圧車ばんぶくんの抗弁（6-7ページ）

続く見開き場面では、高圧車ばんぶくんの全体が見える絵が、中央に左向きに斜め前の方から映し出される。この車も、のっぽくんに負けないぐらい画面に大きく描かれている。車自体としてはこちらの方が大きいのだと言わんばかりにせり出している。ただし、ここでは左側にはしご車ののっぽくんの車体とはしごの先端部分が前場面と同じ右向きに、一層大きく描かれ、タイヤも下の所が切れている。ばんぶくんが右向き、のっぽくんが左向きだから、両者は向き合う関係になる。それによって、対峙していることが、見ている幼児にも、印象づけられることになろう。他方で、主人公のじぶたが一部ではあるが対照的に右端に描かれ、片方の目しか出ていないが、ばんぶくんの方を見上げている。この場面の文章を挙げて、以下に考えられることを記していく。

(エ)「①すると、ばんぶくんが、(不満そうに)おなかをふくらましながら、いいました。

『②あつはつは、ぼくのはないきのつよいのをしらないな。③ぼくがちからいっぱいみずをはきだせば、どんなあついひでも、きえてしまうよ。』」…①は、「すると」で始まり、「おなかをふくらましながら」言うのであるから、当然のっぽくんの言い分に対して抗弁しているわけである。②において、発言の最初に、「あつはつは」とあるのは、不満そうな様子だったのに、もうこの時点では余裕を取り戻して笑っている。他方で、そう見せようとして、わざと笑って見せているという面もあるのであろう。鼻息の強さとして話しているのは、馬力があるということであろう。そして、③の最後の一文で強調しているのは、熱源が高温になり、よほどのことがないと消しようがないと見える火でも、ばんぶ君が高圧車の力を尽くして水を勢いよく吹き出せば、どれほど火力のある火でも一瞬の間に音を立てて消えてしまうという一点である。ここでいう「あついひ」(高熱を発する火)はとうとうときに出てくるのであろうか。ともかくその時にこそ、最も威力を発揮するというのである。もし、このことばどおりなら、火事があるか、さらに広がるかに決定的な力を持つ消防車だと言えよう。とすると、ばんぶくんの強みは、一点であっても、きわめて強力である。先にはしご車ののっぽくんの言い分にうなずいた聞き手は、ここでまた高圧車ばんぶくんの言うことにもうなずかされてしまうのである。これを聞いているじぶたは、ばんぶくんもここぞという強みをもっていることを悟ることになったわけである。

#### 4 救急車いちもくさんもその不可欠であることを主張（8-9ページ）

救急車のいちもくさんは、最初に登場する2-3ページでは、はしご車ののっぼくん、高圧車のばんぷくんと比べて小さいように見えたが、次の見開きでそれだけを全容が見えるように目の前に大写しにされると、これはこれで立派に見えてくる。真っ白な車体の前に緊急の印である赤いネオンが回っているのも、新鮮である。車体が長めにとってあって、救急患者がゆったり横になれるように作られている。普通は見ない色の組み合わせであり、長さがかかなりあるのも見慣れないだけに珍しく、美しいとみえるものであろう。車の上部に車内の換気をよくするために特別に2か所の換気口がつけてあるのも、さすがと思えるものである。交通信号よりも患者の生命の安全を優先させるため、マイクがつけてあるのも、やはり特別仕様だと思えよう。前の2台は堂々たる姿を見せるのが目的であったから、止まった様子でよかったのである。ところが、いちもくさんは、車体が前のめりになっており、今にも跳び出していきそうである。ライトの目もまっすぐに進む方向を見据えている。この見開き一面の下記の本文には、次のようなことが考えられて来よう。

(オ)『①おっとまってくださいよ。』と、きゅうきゅうしゃのいちもくさんがいいました。『②けがにんがでたらどうするね。③やっぱり、わたしがいなけりゃこまるでしょ。④ぴーぼーぴーぼーと、どこにでも、いちもくさんにかけて、⑤けがにんをびょういんにはこんであげるんですからね。』…前の2台だけで話が終わりかねないので、①「おっとまってくださいよ。」と、救急車いちもくさんが口を出してくる。どこかで、出番を失いそうな予感がしたのだろうか。先に拳がった〈はしご車の〉のっぼくん、〈高圧車の〉ばんぷく君は、最初の紹介があった後は、もう括弧抜きで紹介してあるのに、いちもくさんは、下線部のようにきちんと「きゅうきゅうしゃのいちもくさん」としようかいされる。2台の存在感が圧倒的で、急に白い車が目の前に現れてもすぐに消防車として何の仕事をしているのか幼児が思い出しにくいと思ったか、最初の紹介からかなり離れているため幼児が思い出しにくいと判断したか、そのどちらかであろう。「きゅうきゅうしゃの」と断っておいた方が両雄と並び立つ印象を受ける。②の二つ目の下線部のように火事で「けがにんがでたらどうする」と聞かれたら、たしかに救急車いちもくさんがいなければ、どうにもしようがないのだと気づかれてくる。。だから、②・③のいちもくさんの自問自答にあるとおり、ここにいちもくさんの独自の役割が読むものに明確に意識されるわけである。高圧車のばんぷく君やはしご車ののっぼくんが火を消し、のっぼくんが窓から人を救っても、けがをしてどのくらい生命の危険があるかわからない人も一旦病院に運び入れなければ、対処のしようがないのである。やはり消防署のすべき仕事のうち、不可欠の部分を任されているのである。それだけに、のっぼくんたばんぷくんの華々しい活躍ぶりを見せつけられるような話を耳にしても、ひるまずにいられるようである。なんととっても、人の命にかかわる重大で決定的な役割をになっているためである。④の「どこにでもかけて」というのは、先に挙げたはしご車・高圧車と比べて、かなり狭いところでも、道のあるところならどこにでも行けることを強調していよう。「ぴーぼーぴーぼーと、…いちもくさんにかけて」は、緊急の際には信号よりも優先して、けが人のいる場に急行する点に何よりも誇りに感じているのであろう。ここで「いちもくさんに」という副詞をつかって、幼児に「いちもくさん」という名前がついたゆえんを伝えている。④が火事の現場に急行することを誇ったのに対して、⑤の「けがにんをびょういんにはこんであげるんですからね。」は、運び込んだけ人が人を病院まで無事に運ぶことを力説している。こちらは乗せたけが人に安全に気を付けて運転するためか、速さのことは触れられていない。④と⑤は一連のことであるが、ていねいにどちらにも言及している。

すなおなじぶたには、このいちもくさんの主張もそれはそうだと納得される。

ここまでの3台の消防自動車は、いずれも得意分野をもっている。それだけに、誇りを持って生きることが容易である。ここまで考えが行き着くと、では、じぶたはどういうところに誇りを持つのかという課題がここで浮かび上がってこよう。

#### 5 実際の火事には3台そろって跳び出し、大活躍をする（10-11ページ）

見開きの5面目は火事の現場である。右手の方が火元らしく、画面は右面ばかりか、左面の上側まで赤黒く火の手が拳がっている。赤黒さは天にまで広がり、不吉さを増している。一番前に高圧車のばんぷくくんが最前線に立つ。ばんぷくんの運転席の上方部にある放水線を2人の消防署員が防護服に身を固めて火元に向

け、必死になって放水している。ばんぷくんの前側には上下4カ所の小ライト、後ろ側には特別大きなライトがあり火元の様子を少しでも明確にとらえようとして、光を放っている。画面では、光か水かもわからなくなっているが、現場もそれに近いかもしれない。それでも、ばんぷくんの目は平然と赤黒い中を見据えている。すぐ後ろには、ばんぷくんと同種のはしご車の2台がいて、どちらもビルの高いところにはしごを伸ばしている。はしご車が2台ともはしごを伸ばしたところは壮観で、これほど長いものだったのかとあきれるほどである。ビルに近接したところにいるはしご車は、どうも5、6回の窓にはしごをかけ、2人の署員がはしごを上っている。前の窓から中をのぞいている消防員が、延焼を免れるために水をかけておく必要の有無を判断したり、助け出す人がどこにいるか見つけ出したりし、もう1人続いて上ってきている消防員と協力して人を抱えて下ろすかなにかするのであろう。手前のはしご車のつぼくんのはしごは、画面ではさらに高いところ(画面では切れていて、見えないが、おそらくビルの屋上)にはしごをかけているらしく、消防員がもうすぐ登りつこうとしている。のつぼくんの目も、画面の一番上を上る消防員に向けられている。地上にいる消防員が長いホースをはしごにそって上に上げようとしているので、おそらくビルの屋上から火元か延焼し始めているところかに水をかけて協力して、火を消そうとしているのであろう。もう1台のはしご車は赤黒い火事場から出てきた、もうもうとした煙で、車体ばかりかはしごの下の部分まで見えなくなっている。その中でも光線は放たれていて、見えにくい中で火事を消し、人を助ける営みが続けられるわけである。救急車のいちもくさんは両者の後方に控えているが、高圧車ばんぷくん、はしご車のつぼくんに劣らず、緊張感を共有している。すでにけが人が運びこまれているようで、もう走り出している。その後ろに多くの見物人が取り巻き、消火活動を見守っている。

この真っ赤な火の海に包まれた世界に、以下の本文が記されている。引用して、考察を加え、じぶたの気持ちを考えていく。

(カ)「①こんなじまんばなしをしながらも、おおきなかじがあれば、3だいそろってとびだして、だいかつやくするのです。

②ばんぷくんは、ひのもとをめぐらして、みずをはきかけます。③のつぼくんは、するするとはしごをのぼして、ビルのまどからホースでみずをかけたり、ひとをたすけたり。④けがにんがでれば、いちもくさんがびょういんにはこびます。」…①の「こんなじまんばなし」で4ページから9ページまでののつぼくん・ばんぷくん・いちもくさんのそれぞれが話したことを総括し、誰もが自分が消防署で一番重要だと言わんばかりの話しぶりだが、大きな火事になれば、そろって飛び出し、町の問題になるような大活躍をみせるという。協力するということまではいかないが、各々の役割が違うため、それぞれの仕事を存分にしても競合することもなく、結果として一緒に大火事を鎮火したことになるのである。こうなると、自慢するのには自慢するだけの裏付けがあることにもなる。②にあるように、ばんぷくんは「ひのもとをめぐらして、みずをはきかけ」火災の源を断つのである。また、③のように、のつぼくんは「するするとはしごをのぼして、ビルのまどからホースでみずをかけ」火の広がりを抑えたり、逃げ場を失って困っている「ひとをたすけ」という人命救助をしたりするのである。そして、いちもくさんは「けがにん」を早急に「びょういんにはこび」、傷害の程度を最小限に抑えることに貢献するのである。同じ職場で働く3台がこのように大きな火事の時大活躍をして、誰も否定できない役割を果たしているのである。

じぶたも、自慢するのはいやだが、どの人も言うだけのことはするからなあと認めるほかあるまい。

### 三 第二場面における絵と文章から汲み取れること、そこから考えられるじぶたの心

#### 1 初めて主人公に光が当たり、じぶたが紹介される(12-13ページ)

見開きの絵は、最初の人物紹介(2-3ページ。ただし、じぶたが同じ消防署内にいるのに、わざと紹介されなかった。)と同じ消防署の格納庫で、救急車いちもくさん、はしご車のつぼくん、高圧車ばんぷくん、じぶたと、同じ場所にいるが少し右斜めになったり、左斜めになったりして、一人ずつが見開きで発揮していた良さが思い出しやすいものになっている。じぶたも表紙と同じ構図で書かれており、表紙を思い出した幼児にはやっとなじぶたが出て来たと思えるものである。他の3台の消防車には近寄って見たり、憧れたりする子どもがいるのに、じぶたの周りには一人もいない。それで、じぶたの目も、ついつい子どもの様子を見

て、3台の車を羨ましく思っているようである。そこで、また本文を引用し、気づきを入れたうえで、じぶたの心を探ることとする。

(キ)「①このしょうぼうしょのすみっこに、ふるいジープをかいらようしたちびっこしょうぼうしゃのじぶたがいました。

②じぶたには、ちいさなポンプがついていました。

③それから、ぷーぷーとなるサイレンもついていました。

④けれども、だあれも、じぶたのことなんかきかけません。⑤まちのこどもたちも、のつぼくんやばんぶくんやいちもくさんのことはおおさわぎをするくせに、じぶたのことは、『なんだ、ジープをなおしたのか。』なんていうだけでした。」…①舞台となる消防署の隅が、じぶたの定位置だったようで、「しょうぼうしょのすみっこに」いたのだという。「すみ」は、『新明解国語辞典』（三省堂）では「かどの内側で、それ自体は直接（あまり）役に立たない場所や部分」とある。「すみ」についた「っこ」は、「取るに足りない卑小な存在であることを表す。」とあり、「ちびっこ・娘っこ・尼っこ」などが、例にあがっている。改めて2-3ページに戻ってみると、他の3台の間は空いているのに、じぶたは右隅に間のあまりないのに、やっと入っているようにも見える。13ページでも、右の壁際近くにおり、「すみっこ」と書くことで、場所さえも「取るに足りない」ところ、普通の消防車には「役に立たない」ところにいるのだということが、うすうす感じられてくる。そこに、「ちびっこしょうぼうしゃのじぶたがい」たのだと初めて紹介されるのである。自動車であるから、ある程度の大きさはあろうが、わざわざ「ちびっこしょうぼうしゃ」と書かれるため、読者にもほんとうに小さいのだろうと思えてくる。「ちびっこ」という幼児が言われ慣れていることばであるため、若干親しみも湧くかもしれない。確かに他の消防車と比べれば、ぐんと小さいのも事実なのである。じぶたにとってかわいそうなことは、「ふるいジープをかいらようした」ことである。何かそうなる理由があるであろうが、それは語られていない。

②・③の文には、じぶたの機能をうかがわせる内蔵しているものや備え付けられているものが記してある。②「ちいさなポンプがついて」あるのは、小さくてもそれなりに馬力があるというのであろう。「ぷーぷーとなるサイレン」がついてあるのは、この先に火事が起こっていますと注意を喚起し、道行く人にかんりのスピードで急行するので危ないですよ、よけて下さいと、知らせているのであろうか。「ポンプがついて」いる＝馬力があることは、高圧車ばんぶくんの「はないきのつよ」さに通じ、「ちからいっぱいみずをはきだせ」る力も、少々はありそうである。「ぷーぷーとなるサイレン」は、救急車いちもくさんに取り付けてある拡声器を思い出させ、車ではなくとも、自転車や走ったり歩いたりする人、近くにいる人に注目させ、よけさせることにはなろう。全く3台の華やかな活躍を見せる消防車と全くつながらないわけでもないのである。④では、それにもかかわらず、誰もじぶたの存在を気かけないというのである。それを「だあれも、じぶたのことなんか」と書くところには、じぶた自身が「だあれもぼくのことなんか」気にかけていないんだと心の中で叫んでいるのが反映されている。そうでなければ、下線部の「だあれも」という気かけないことをさらに強める口語や「なんか」という価値の低いものとしてあげる助詞を加えるようなことはすまい。それで、この文から語り手の目がじぶたに重なってきたと、読み手にも伝わってくるわけである。

じぶたのことを気にかけていないことを露骨に行動で示すのは「こども」で、⑤にあるように、「まちのこどもたちも、のつぼくんやばんぶくんやいちもくさんのことはおおさわぎするくせに、じぶたのことは、『なんだ、ジープをなおしたのか。』なんていうだけでした。」と、あまりにも対照的な言動を見せる。3台の消防車には、近くに寄って見たとか、触って見たとか言って、大騒ぎするのであろう。この言動を「くせに」というのも、じぶたの立場にたっているゆえである。古いジープを改良したのは何か事情があつてのことで、じぶたのせいではない。しかし、子どもたちはそう言い放って、古いジープの改造車などには近づきもしないわけである。じぶたにはじぶたになる前のことを口実にして遠ざかれても、反論するすべもないのである。ただ、寂しさはしっかり感じたと思われる。

## 2 働き者だが、三台の消防車には手厳しく批評される（14-15ページ）

次の見開きの絵は、一戸建ての家が火事になったとき、4人の消防員とともに駆けつけているじぶたの姿

が描かれている。一軒の窓からの火といっても、炎の勢いはすさまじく、煙は立ち上り、大きく広がりつつある。火事に気づいて、バケツに水を汲んでリレーしようとしている人が二人いるが、火力が強いのか、火の近くにいる人がたじろいでいるように見える。「これは、消防車が来ないと消し止めようがない。」とでも言っているのであろうか。周りは火事に気づいた人も、走って近づく人もいるが、方向が違って平然と自転車車をこいで、荷物を運ぶ人もいる。この混乱のさなか、逃げようとするどろぼうさえいる。そこに接近しようとしているのがじぶたである。じぶたの車はずいぶん前傾しており、火事の現場に急いでいるのであろう。じぶたの瞳ももくもく上がる火の粉と煙を真正面に見据えている。4人の消防員はそのうち3人が火の熱さから身を守る防護服を着、耳も口も覆っている。車に座って乗れるのは2人だけで、右の足台にひとり、後ろの足台に一人立って乗っている。車が身軽でもあり、到着したときすぐに走って水口につないだり、ホースを持ったりするためであろう。

絵はそこまでであるが、本文は下記のようになる。ここには、じぶたのどういう心がうかがえるであろうか。

(ク)「①じぶたは、ちびっこでもはたらきものです。②ちいさなうちがかじになると、すぐにとびだしていきます。③ぶーぶーとサイレンの音もいさましくはしっていつて、たちまちかじをけしてしまいます。④でも、のっぽくんとばんぷくんといちもくさんは、いつでもこういいます。⑤『なんだ、ぼやか。ちびっこでちょうどいいんだ。』とか、『ぶーぶーなんていつて、あれでも、いさましいつもりだね。』なんて……。」…①にあるとおり、語り手は小さくても「はたらきもの」と、きちんと評価している。②・③が、じぶたの活躍ぶりである。どういう火事の時、どのようにとびだすのか、途中どのように走っていくのか、そしてどのくらいの時間で火事を消すのかが語られている。小さなうちが火事になると、すぐにとびだしていき→ブーブーとサイレンの音も勇ましく走っていく→たちまち火事を消してしまうのように、多少ユーモアもただようが、よくやっていると言えよう。最後の「たちまちかじをけしてしまいます。」には、語り手の感嘆の思いがこもっている。④・⑤が、それなのに同僚の3台が、「いつでも」きくたびにきいてもじぶたの消した火事が「ぼや」で、もともと火事に至る前の段階だったものと断じたり、サイレンの音を「あれでも、勇ましいつもりだね。」と笑いものにしたりするというのである。

じぶたの自尊心をずいぶん傷つけることだが、じぶたはこういわれるのはいやだが、君たちの活躍と比べれば笑われても仕方がないとも認めているかに見える。反論しないと言うのは、そういうことであろう。

### 3 じぶたの無念—大きな火事には出動させてもらえないこと— (16-17ページ)

その次の見開き場面は、大きなビル火事が起こった時の「いざ出動」と言う場面である。消防員が、格納庫の2階から階下につながる鉄棒を伝って次々におりてきて、はしご車や高圧車に飛び乗ろうとする場面である。運転手の掛け声に答えて走りながら手をあげるそぶりにも、やる気と緊張感がみなぎっている。このような場面を、後に残されるじぶたの目から、羨ましそうに見つめるところになる。文面を引用し、じぶたの心情について、考えていくこととする。

(ケ)「①そのたびに、じぶたは、『ぼくだって、おおきなビルのかじがけせるんだぞ!』とおもいます。②でも、ビルのかじのときは、しょちょうさんが、じぶたに、『しゅつどうせよ!』といってくれないのです。」…①の「そのたびに」は、たちまち火事を消しても、後3人の消防車たちから、ぼやに過ぎなかったとか「あれでもいさましいつもり」とか言われるたびにである。このような酷評を「ぼくだって、ビルのかじがけせるんだぞ!」と心の中では思っていたようである。気持ちとしては、決して他の3台に負けてはいないのである。しかし、②にあるように、署長さんが出動を命令してくれなければ、じぶたには、どうしようもないことである。この署長さんが出動と言ってくれないことは、こちらに覆す根拠があるわけもなく、じぶたの心に重くのしかかってきたことであろう。「でも」は感情的逆接で、②の文は、じぶたの悲しみを凝縮した事実になろう。無念だが、じぶたの「おおきなビルのかじがけせるんだぞ。」という負けん気で放ったことばも、ほんとにできるかと問い詰められると、答えられないしなあと、自分自身でも思ってしまうのであろう。

### 4 磨かれた3台の車と見比べて、自分の存在が悲しくなる (18-19ページ)

見開きは、消防車4台の間々に制服・制帽で身を包んだ署員が並び、正式な場なのだと感じさせる。じぶたを除く3台は、みな静粛な場にふさわしくしようとしてか、目はまっすぐ前を向き、半眼にしている。しかし、じぶたはやはり3台の方を眺めずにはいられない。一番左に署長さんが右手で敬礼の手を顔の横に上げて、歩こうとしている。署長が自分たちの近くに来た時だけ並んだ署員たちも敬礼して返すようで、救急車の右手にいる2人の署員のみやはり敬礼している。この場に書かれた本文を挙げ、またじぶたの気持ちを掘り下げていきたい。

(コ)「①きょうは、けんえつのひです。②じぶたもぴかぴかにみがかれて、のつぽくんとばんぶくんといちもくさんのよこにならびました。

③せのたかひのつぽくんをみあげて、『そらにとどくような、あんなはしがほしいなあ。』とおもいました。

④がっちりしたばんぶくんをみて、『ちからのつよいポンプがほしいなあ。』とおもいました。

⑤いちもくさんをみて、『かっこうがいいなあ。』とおもいました。

⑥なんだか、じぶんがとつてもちっぽけで、みにくくおもわれて、かなしくなりました。」…①の「けんえつのひ」は、ことばは知らなくても、絵を見れば、えらい人が見回っていく日だとわかってくる。②が「じぶたもぴかぴかにみがかれて」とあるため、のつぽくん・ばんぶくん・いちもくさんはもちろんのことであることが、しっかり伝わってくる。きちんと認められているから、同じようにみがかれたのであろうが、いざ並んでみると比べられるような気が自ずと湧いてくるのであろう。③・④・⑤いずれも、それぞれの良さを見抜いた表現になっている。なかでも、のつぽく君を見上げていった「そらにとどくような、あんなはしがほしいなあ。」に、じぶたのあこがれが端的に表れている。下の方から上を見上げると、なるほど「そらにとどくような、あんなはしがほしい」と思えるようになるのであろう。⑥で「なんだか、じぶんが、とつてもちっぽけで、みにくくおもわれ」たとあるのは、つい自分はどうなのかと、つい三者と見比べてしまったゆえであろう。もともと小さくて古いジープの改良車であるため、3台の車のようにはならないことは当然なのであるが、ここで悲しくなったのは、自らの存在の小ささを自覚したゆえであろう。いざ振り返ってみると、他の車のような、自分しかできないことはなく、率直にみて何も胸を張って自分にはこれができると言いきれぬものはないのである。しかしこのような内省力は、ほかの自己主張の強い3台には見られなかったものであり、後に心が強くなれる吸引力を生む母胎ともなっていよう。

#### 四 第三場面における絵と文章から考えられること、そこに見られるじぶたの心

##### 1 山小屋の火事の発生で署長さんからじぶたが指名され、とびだす(20-21ページ)

見開きの場面は大きく変わる。消防署にかかった電話をうけている職員が画面の左上におり、はしご車・高圧車・救急車に乗る人たちもいつでも出られるように準備万端用意したが、署長が指名したのはじぶたである。じぶたの目がはっきり前に向けられていて、今までどんな思いが渦巻いていたにしてもこの瞬間に振り切ったことを感じさせる。車体は前傾しており、すでに風を切り始めている。横と後ろの乗組員も足台に飛び乗っており、首の後ろについたところが風になびいている。思わずかっこいいと思ってしまうところである。防護服を着込んで、はしご車に乗り込んだ署員は笑顔でじぶた組を見送っている。心の中で「やっと出番が来た。よかったな。今日は君たちじぶた組が活躍する日だ。頼むぞ。」とでも言っているのであろうか。表情で示したのは一人だけであるが、今回防護服に着替えて残ることになった多くの消防署員が同じ思いを持ったことであろう。

本文を引用して、この場面で起こったことを振り返り、じぶたの心にさらに迫っていくようにしたい。

(サ)「①そのときです。②しょうぼうしょのでんわが、りりりりりーんとなりました。③となりむらのけいさつからでんわです。『④たいへんです。やまごやがかじです!このままほっとけば、やまかじになりそうです!』⑤しよちょうさんはかおいろをかえました。『しゅつどうだ!』『おい、のつぽ。いや だめだ。はしごじゃ とどかない!』『おい、ばんぶ。いや だめだ。みちがせまい!』『おい、いちもくさん。いや けがにんはまだだ!』⑥しよちょうさんは、じぶたをみました。『⑦よし、じぶただ。たのむぞ!』⑧しょうぼうのおじさんが、いくにんも、おのをかついで、じぶたにとびのりました。⑨じぶたは、サイレンをならして

とびだしました。⑩ぶーぶーぶー ぶーぶーぶー、もうだれもわらいません。」…①の下線部「そのとき」は、じぶたが、のっぼくん・ばんぶくん・いちもくさんとわが身を比べて悲しさに打ちひしがれている時である。②の電話の音が「りりりりりーん」と長すぎる気がするが、その後消防署にとって最重要なことが告げられるという前知らせである。これだけ長いと、いくら悩んでいようと、じぶたの心に沁み込んで来そうである。実際、この後じぶたが指名されるまで、じぶたの心情に地の文で触れるところはなくなる。じぶたの迷いもふっとんだのではなからうか。どこかが火事になったという電話の前では、なにもかもが小さなこと、ぐじぐじ考えてはおれないことになるのである。③で、電話が隣村の警察からとわかり、④以下の文で、火事はそれ自体は山小屋だけにとどまっているが、近くに木が林立するなどしており、周りに火が移れば、どこまで大きな山火事になるか、測り知れないというのであろう。⑤の署長さんが顔色をかえるのは、検閲の日で改まった態度でいたのが、今回の火事の危険性の大きさを自覚したゆえであらう。その後ののっぼ・ばんぶ・いちもくさんに呼びかけて考え直すところは、署長の心の中を幼児にもわかるようにことばにしたものであろうが、みんなの前でこれだけ悩むというのは、署長の判断としては、不自然さを伴う。絵からしても、火事の性格からしても、署長さんがじぶたを選ぶ場面だとわかっていて、それを盛り上げるためにわざと言っているのだと解したい。「おい、のっぼ。いや だめだ。はしごじゃ とどかない。」がとくにおかしい。はしごを山小屋のあるところまでかけることはできないという、無理な想像をして否定するということが、この急を要する場でできるであらうか。道幅からして車体の大きなのっぼくん・ばんぶくんは、初めから行きようがなく、救急車のいちもくさんも山道を通れるという保証はなく、けが人がいるとの連絡は入っていないというのが、自然な判断であらう。それゆえ、肝心なのは⑥の「しよちょうさんは、じぶたをみました。」からになる。当然、じぶたと目が合い、じぶたの意気込みを見て、「⑦よし、じぶただ。」と決断を伝え、「たのむぞ。」とじぶたに託すのである。すると、⑧にあるとおりに、じぶたと一緒に行く「しょうぼうのおじさん」も、万事承知で、山小屋の近くの木に飛び火しないように切り倒すため、「いくにんも、おのをかついで」すぐに「とびの」ってくる。用意は整ったので、じぶたは、「よし、出発。」という思いを込めて、⑨のように、「サイレンをならしてとびだ」すのである。⑩にあるとおりに、「ぶーぶーぶー ぶーぶーぶー」という音がいくらおかしくても「もうだれもわら」らない。じぶたに出せるのは、この音しかなく、この音がじぶたの決意表明なのである。

## 2 狭い山道を登る (22-23ページ)

見開き一面が、緑に包まれた世界である。山を少し上った丘のようになった狭い道を進むじぶたが描かれている。道は、山に沿って左下から右上の方へうねって、ずっと続いている。道幅が広くなる場所もあるが、上になるにつれて狭そうなところがあり、大丈夫かどうか読者が心配になる面もある。ほんとはジープなので、よほどのことがないかぎり道なき道を通っていけるのである。左下中央まで来ているじぶたの車でも道幅いっぱいになっており、右横の足台に立っている消防のおじさんも、じぶたの車体に体を寄せている。画面の右上から不吉な火事の煙が空を覆い始めており、早く到着しないと危険だという気にかかれるところである。ただし、じぶたの目が、煙の様子をしっかりと見て今山小屋の火がどういう大きさになっているか、的確に把握しているように見える。間に合うのだろうという安堵感を抱かせるものになっている。この場面の本文を引用し、じぶたの心をさぐっていくこととする。

(シ)「①まちをはしりぬけて、はしをわたり、もうとなりむらです。②やまのちゅうふくから、くろいけむりがでています。③じぶたはやまみちをのぼりました。④せまいけわしいやまみちでも、ジープのじぶたならへいきです。」…①に「もう」隣村とあるように、もともとジープなので、馬力はあり、速さもわりとあるらしい。みるみるうちに電話のあった隣村までついたと言う。期待ができそうである。それに対して、②の文では、山小屋が山の中腹にあったようで、その「ちゅうふくから、くろいけむりがでてい」という。読み手としては、危険な予感が募るところである。この煙が、炎を噴き上げるまでに、猶予はあまりなさそうである。一方、③では「じぶたはやまみちをのぼりました。」とある。ぐっと目的の場に近づいた感がある。いよいよだなという思いが湧くところである。④には、「せまいけわしいやまみちでも、ジープのじぶたならへいきです。」とあるところは、ああ、ジープできていてよかったと、胸をなでおろすところであらう。

文も軽やかになっていて、これからが楽しみになるところである。

### 3 火事現場での活躍 (24-25ページ)

見開きの左側に、山の中腹の火事現場があり、それを必死で消そうとするじぶた組の奮闘も、それを支えるため谷川から水を引く姿も、隣村の消防隊員が山小屋近くの木々を切り倒し続けている姿も集中している。一つ前の見開き (22-23ページ) とは反対側の場所に来ているらしく、右手には別の小山が見えている。火事の起きている山はけわしく、勾配も急である。火力は強く、火の粉を噴き上げ、煙ももうもうと立っている。この場面の叙述に即して、じぶたの気持ちの動きを追っていきようにしたい。

(ス)「①やまごやがめらめらもえています。②じぶたは、たにがわにホースをおろして、みずをすいこむとちからいっぱいひもとはきかけました。

③じゅっ じゅっ じゅっ。おとをたてて、しろいけむりがあがります。

④しょうぼうのおじさんたちも、いっしょうけんめいです。まわりのきを、おのできりたおします。

⑤じぶたは、いきのつづくかぎりみずをかけました。

⑥じゅっ じゅっ じゅっ。たちまちかじはきえました。

⑦よかった、よかった。これでやまかじをふせげました。」…山場になるところである。その切迫感を改行を細かくして伝えている。①に「やまごやがめらめらもえています。」とあるのは、じぶたが山小屋に到着したときに。直接目にした光景であろう。ずいぶん急いで山道を駆け上ったにもかかわらず、火は小さくないのである。②はじぶたがとった行動を順に書いている。はずむ動悸を抑えて、一つ一つの行動を的確に実施している。このとおりを読んでもらっている子どもでもできそうな動作として記している。とりわけ、「みずをすいこむとちからいっぱいひもとはきかけました。」は、動きとして共感できる場所である。③は、1回目の結果である。音を立てて、白い煙が上がるが、まだ火元がどうなったのかには言及されない。④の消防のおじさんたちの「いっしょうけんめい」は、じぶたの消火活動が実るように、火元を見極め、ここぞと思うところを狙ったり、じぶたが少しでもいっぱい吸い込めるように、ホースの位置を工夫したりしたのである。なお、ここでいう「しょうぼうのおじさんたち」は、じぶた組の人たちに限らない。隣村の消防署のおじさんもおり、ともに山火事になるのを防ぐために、必死におのできりたおしたり、倒した木が重なって飛び火したりしないように倒した木をひきずってよけたりしてくれているのである。⑤は、そうした協力をわが力にして、じぶたの「いきのつづくかぎり」水をかけたというのである。全力を注いでいることが、文面からつたわってくる場所である。そうすると、⑥にあるように、火の消える「じゅっ じゅっ じゅっ。」という大きな音が再びして、「たちまちかじはきえ」たというのである。⑦は、語り手自身が本文に現れて、心から「よかった、よかった。」と言い、みんなの思いを代弁している。最後の「これでやまかじをふせげました。」には、山火事というビル火事以上に恐ろしい最悪の事態に至らずに済んだという、語り手のほっとした気持ちが、端的な言葉に表れている。じぶたの気持ちは書かれていないが、全力を出し切って山火事になるのを防げた充実感に満たされたであろう。

### 五 山火事になるのを防ぎ切った後、どうなったか (26-27ページ)

見開きの場面は、じぶたの周りを子どもたちが取り囲み、さらにあちこちから走って近づこうとする子もいるという構図になっている。消防署長もわざわざ出てきて、一役を買っている。左手で自身の方を指さしているのは、山小屋が火事だと聞いた時、これはじぶたがいいと言って行くように言ったのは私だったんだよとでも、話しているのだろうか。「あの時、我ながらよくじぶたが選べたものだとほっとしている。」と言い、そこから、じぶたがどのように山道を登り、ここまで見事に山小屋の火を消すまでに至ったかを、消防署のおじさんたちからの話を交えて再現することになる。さらに、次のような話が繰り広げられるかもしれない。たとえば小さいし、古いジープを作り替えたものだから、決して格好がいいとは言えないが、じぶたの底力が、この少し遅ればば一大事という時に発揮されたことをうれしく思っていること、じぶたには話していなかったが、じぶたを消防自動車に改良しようとしたのも署長自身であったこと、町はずれの農家の軒先でその家のおじいさんが乗り慣れたジープをいとしい思いで撫でながら、「よく働くのでかわいくて仕

方がないが、こちら（私）の方がくたびれて、もう乗れそうにない。馬力はある、ここぞという時に思わぬ力を出してくれるのじゃが。」と言うのを耳にし、それなら、消防自動車としても活躍してもらえるかもしれないと思い、譲ってもらい、改良してこの消防署に務めてもらっていたこと、そして今回おじいさんの言ったとおりに思わぬ力を出してくれたと、いくらでも話は発展していったことであろう。それを子どもたちは一心に聞き、じぶたを一層誇らしく思うことになろう。じぶたはそれを心安らかに聞き、にこにこしながら子どもたちを見守っている。他の3台は、いつもの救急車いちもくさん、はしご車のつぼくん、高圧車ばんぶくんの順に左上半面から少し右にかかるところにならんでいる。しかし、今度は隣のばんぶくんが、じぶたの周囲に署長さんと子どもたちが集まっているのを羨ましそうに眺めている。のつぼくんといちもくさんは、今からじぶたに駆け寄ろうとする子どもを無理もないという様子でみている。穏やかな瞳で子どもたちを包み込むじぶたの右上手の方から斜め下の方へ、少し前に出たことがわかる新聞紙の一部に、じぶたたちが懸命に谷川から水を汲み、山小屋の火を消している現場の写真が大写真で載り、いっぱいの記事内容が小見出しもつけていていねいにかかっている。こういう新聞記事が出て、みんなじぶたが見えないところで奮闘していたと知って、この大団円の場面になったのだと了解されるものになっている。以下、本文を改めて引用して、この時のじぶたの心に迫っていく。

(セ)「①つぎのひです。まちのしんぶん、じぶたのしゃしんがおおきくのりました。②そして、しゃしんのそばに、こうかいてありました。

『③やまごやのかじは、たばこのすいがらから。④じぶたのだいかつやくで、やまかじにならずにすみしました。⑤となりむらでも、じぶただい2号をそなえることになりました。』

⑥それから、まちのこどもたちは、しょうぼうしよをのぞくと、かならず、じぶたをゆびさしていいました。

『⑦やあ、じぶたがいるぞ!⑧ちびっこでも、すぐくせいのうがいいんだぞ!』…①の「つぎのひ」は、山小屋の火事を消し止めた翌日。②にあるとおり、町で出している新聞に、大仕事を成し遂げたじぶたの写真が大々的に載ったとある。そして、③・④・⑤の3文に新聞記事の内容がまとめられている。③には、山小屋の火事の原因がたばこの吸い殻にあったことを指摘している。④の文には、誰（じぶた）がどのくらい活躍（大活躍）したか、どうして新聞に載せるほどの重大事であるのか（火が広がって山火事という大惨事になるのを未然に防ぐものになったから）という中心になることが記される。⑤には、隣村の火事だったのに、こちらの町の消防署にじぶたがいたから助かったのを、これを教訓にして隣村にもじぶた第2号を準備することになったとある。山火事になる恐れがある場所なら、自分たちの地域にその懸念を少しでも速く火事に現場に到着できるようにする必要があると、よくよく理解されたためであろう。これもじぶた効果と言えるものである。⑥・⑦・⑧の文には、子どもたちのじぶたを見る目が一新したことが書かれている。そのうち、⑥・⑦では、消防署をのぞいた時に、他の3台の車を見て「おおさわぎ」していたのに、今度は必ず目でじぶたを探し、見つかるとうれしくて「やあ、じぶたがいるぞ!」と声にまで出してしまふ。そして、ぱつと見ると、小さくて大したことはないように見えるけど、「(消防自動車としては)ちびっこでも、すぐくせいのうがいいんだぞ!(そうだよ、じぶた。ぼくはしってるからね。)」と、じぶたにも承認を求めるのである。じぶたも、快くうなずいたに違いない。

なお、表表紙は、この終わりの場面よりさらに後日のようで、じぶたは男の子が思わず拍手しているのに、心動かされることなく上を向いて、平常心をたもっている。裏表紙には、女の子が友に「おいで。じぶたを見に行こう。」と誘っている。このような憧れのまなざしにも動じずに、消防自動車として、いつでも出動でき、最高の性能を発揮できるように保とうとしているのであろう。

## おわりに

この絵本を人間成長物語としてとらえた時、じぶたは、どんなふう成長したと言えるであろうか。

「劣等感を克服する物語」とも、「取るに足らぬ一般職と見られる仕事のなかにも専門職に劣らない独自の役割があるのを見いだす物語」とも言われよう。そのいずれの可能性も認めたくて、ここでは、「固定的な見方から離れて、ほんとうの自己をやっと発見するに至った物語」と言っておきたい。大きくて見栄えが

し、華々しい場で大活躍することに憧れていたが、小さく見栄えのしない存在でも、得難い機会を生かして、全力を尽くして人のためになろうとつとめれば、最も恐るべき山火事（大きい火事よりもっと大きいこと）を未然に消し止めることも不可能ではないのだと気づく話なのである。転機の子兆となったのが、消防署にかかってきた「りりりりりーん」という緊急を知らせる電話であり、署長さんの「よし、じぶただ。たのむぞ!」という出動命令であったとしても、それを人生の一大転換期として生かしたのは、じぶた自身である。サイレンを鳴らしてとびだしてから以降の、じぶたの動きには、一瞬の無駄もない。人が見ていようがいまいが、己の内心から湧きだす力を出し尽くす美しさがある。これまであれこれ悩んだときに、じぶたは気づかなかったかもしれないが、ほんとうに願っていたのは、この姿であったかもしれない。

幼児も、多くの温かい目に見守られながらも、どこかで「あなたがいなければよかったのに。」とか、「ほんとに、何にも取り柄がないね。」という心ない言葉に出会うこともあるかもしれない。そういう場に出会っても、心の中に火を燃やし続けていられれば、後になってこう言われたことが、自己を否定することにならなかったことを、誇らしく、もしくは懐かしく思い出されよう。『しょうぼうじどうしゃ じぶた』のような絵本が、柔らかい心を持った時期（もしくは人）には、心の支えになるかもしれないのである。読み聞かせの練習にも、力を注ぎ、読み手の心も自ずとにじみでるような場が作りだせるようにしたい。

(補記) 論述の性質上、注はほとんどその場に入れている。深くお詫びしたい。

<注>

- 1) 国松孝二他編『独和大辞典』(1985年、小学館。359ページ)

## **Study of a picture book as Story of Buildings -In case of “ Fire engine Jiputa which improved a jeep”-**

Shinsho MAEDA

Advanced Course of Childhood Care and Education, Kyusyu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

### Abstract

The purpose of this study is to explain development of story of Buildings(Kindergarten, Elementary school, Junior high school). I make it clear at what kind of event a main character bring up the humanity.